SICC 40075 / MONO
℗ 1990 Sony Music Entertainment © 2012 Sony Music Entertainment
Manufactured by Sony Music Labels Inc. Made in Japan. ® is a Trademark.
WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.

RACHMANINOFF PLAYS RACHMANINOFF

ラフマニノフ
ピアノ協奏曲第2番&第3番

Total time 65:56

ピアノ協奏曲第2番ハ短調 作品18

1 第1楽章 モデラート；アレグロ (9:48)
2 第2楽章 アダージョ・ソステヌート (10:53)
3 第3楽章 アレグロ・スケルツァンド (10:58)

ピアノ協奏曲第3番ニ短調 作品30

4 第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント (14:00)
5 第2楽章 間奏曲：アダージョ (8:39)
6 第3楽章 フィナーレ：アラ・ブレーヴェ (11:27)

セルゲイ・ラフマニノフ(ピアノ)
レオポルド・ストコフスキー指揮 フィラデルフィア管弦楽団(1-3)
ユージン・オーマンディ指揮 フィラデルフィア管弦楽団(4-6)

Recording : April 10 & 13, 1929 (1-3), December 4, 1939 & February 24, 1940 (4-6)
at Academy of Music, Philadelphia

録音年代相応のノイズ等がございます。ご了承下さい。

ラフマニノフ自作自演の貴重な記録

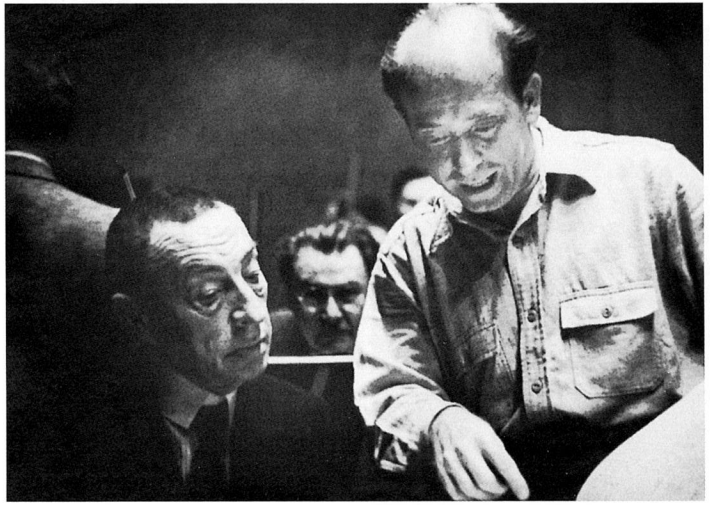
ロシアの大作曲家・巨人的な名ピアニスト、**セルゲイ・ヴィシリエヴィチ・ラフマニノフ**は、1873年4月1日(旧ロシア暦では3月20日)に、地主貴族の子として、同国のもっとも古い町のひとつであるノヴゴロド(現ロシア連邦の同名の州の州都)からさほど遠くない、オネグという村で生まれた。しかし農奴解放の影響で家計が傾き、両親が離別するという不幸も重なって、彼は9歳のときからペテルブルク(当時のロシア帝国の首都、現サンクトペテルブルク)で母の手ひとつで育てられた。ラフマニノフは、音楽的教養の豊かな祖父や両親の感化で、幼少のころからその方面の素質のきらめきを見せ、モスクワ音楽院に入学すると、早くも在学中に「第1番」のピアノ協奏曲を作曲した。また同校を卒業した19歳のときに短期間で書きあげた歌劇〈アレコ〉が、チャイコフスキーの推挙でその翌年ボリショイ劇場で初演されるなどの、目ざましい天才ぶりを発揮した。ピアニストとしても、そのころから頭角を現わしていたラフマニノフであった。

しかし、この指揮者としてもみとめられていた期待の大音楽家を、きわめて活動的なコンサート・ピアニストに転向させたのは、1917年のロシア革命であった。貴族の家柄のエリートであった彼は、共産主義のソビエト政権をきらってパリに亡命し、翌年アメリカに渡って、後日のホロヴィッツと同様、その国を永住の地に定めた。ラフマニノフは生活のため、それまでは自分の作品の紹介に主として役立てていたピアノ演奏家の技能を大いに活用する必要に迫られ、ヴィルトゥオーソとしての活動に精励した。彼は渡米後も、〈パガニーニの主題による狂詩曲〉〈交響曲第3番〉〈交響的舞曲〉その他の名曲を発表し、ロシア時代に上記のオペラや「第3番」までの〈ピアノ協奏曲〉と多くのピアノ独奏曲などでわがものにした、作曲家としての高い名声を維持した。しかしラフマニノフはそれをさらに上回るほどの評価と人気を、ピア

ノ演奏家として獲得したのであった。レコード（と自動ピアノのロール）のための録音も、第1次大戦の終結の翌年から長年月にわたって持続した彼は、晩年に、もういちど祖国ロシアの土地を踏みたいと願っていたということだが、第2次大戦がこの大作曲家・名ピアニストの母国への帰参をはばみ、あと5日で70歳の誕生日を迎える1943年3月28日に、カリフォルニアのビヴァリー・ヒルズで永い眠りについた。彼の遺骸は、ヴァルハラという名のニューヨーク州の小さい町のケンシスコ墓地に葬られたが、後日（1958年）ヴァン・クライバーンがモスクワの第1回チャイコフスキー国際コンクールのピアノ部門で優勝したとき、はるばるロシアの土を持参してラフマニノフの墓前に供えたことは、有名なエピソードである。

セルゲイ・ラフマニノフは、その演奏にヨーロッパで接した野村光一氏の若い日の回想によると「雲をつくような大入道で、じつに大きな手をしており、オクターヴなどは普通の人の5度か6度ぐらいのかっこうで弾いた。したがって、ピアノの音が非常に強烈で、明確そのもので、低音部の和音などは、まるで鋼鉄でもたたくような感じであった」という。彼は、19世紀このかた多くの名ピアニストを輩出したロシアで、同国のリストともいわれるアントン・ルビンシテインにつづく巨星とされるが、その演奏は、ベートーヴェンもショパンもシューマンもすべて、作曲家ラフマニノフの強烈な個性で歪曲していると、ひところわが国できびしく批判された。そうしたラフマニノフ観が浅はかな見解であったことは、古今のピアノ曲中から、他のピアニストが見落としていた未知の美を白日のもとにさらし出した彼の演奏にレコードで接すると、すぐに気付くことだと思う。『モーツァルトから現代までの大ピアニスト』の著者ハロルド・ショーンバークは、ラフマニノフを「ピアノの建築家」と論評し、「彼は自分の手がける作品を作曲家とピアニストの両面から研究して、情緒的な側面と形式的な側面の両方から、その曲の構成の本質を把握した」と指摘しているが、ラフマニノフはまさに、たぐい稀な創造的再現芸術家だったのである。

それにしても、彼が自分の作品をピアニストとして手がけた演奏は、それこそ本家本元の芸術であり、その価値はまさにユニークの一語に尽きる。彼の全4曲の〈ピアノ協奏曲〉を代表する「第2番」と「第3番」のこのCDは、当初のSPとLP復刻をはるかにしのぐ精妙なサウンドによって、ラフマニノフの至芸をいっそう鮮明に私たちに伝えてくれるものであり、かぎりなく貴重な遺品とされるのである。



ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

この曲はラフマニノフの名曲中もっとも通俗的な人気の高い作品のひとつで、それはピアニスティックな華麗な効果を縦横に発揮する一方、造型的にも完璧な統一をもち、ロマン的な気分も色こくただよわせている。ラフマニノフはロンドンのフィルハーモニー協会からの委嘱でその作曲に着手した1899年(26歳)のころから、強度の神経衰弱におかされて、しばらくの間、あらゆる活動からの引退を余儀なくされた。そうした不安と絶望の状態からの脱出に手を差しのべてくれたのは、精神病医のニコライ・ダール博士であった。ラフマニノフはこの名医の新しい暗示療法によって、本来の自己をとりもどし、一気に作曲の筆を進めて、1901年春に全曲を完成、同年11月10日にラフマニノフ自身を独奏者としてモスクワで初演された。この曲が起死回生の恩人であるダール博士に献呈されたのは至当の行為であったが、ずっと後の1926年に、アマチュア音楽家でもあった博士がレバノンのベイルート・アメリカ大学のオーケストラにヴィオラ奏者として参加してこのピアノ協奏曲を演奏したとき、その日の聴衆が、独奏者と指揮者だけでなく、オーケストラの中の博士の起立を求めて、万雷の拍手をおくったというエピソードも伝えられている。

第1楽章 モデラート;アレグロ(ハ短調、2/2拍子、ソナタ形式)

第2楽章 アダージョ・ソステヌート(ホ長調、4/4拍子、3部形式)

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド(ハ短調～ハ長調、2/2拍子、ソナタ形式)

※ラフマニノフはこの「第2番」を1924年にもストコフスキー／フィラデルフィアと録音しているが、レコードとして発売されたのは第2、第3楽章だけであった。今回のCD(1929年4月録音)のオリジナルSPは30cm盤5枚セット。

ピアノ協奏曲 第3番 ニ短調 作品30

ラフマニノフは1909年の秋、初めてアメリカへの演奏旅行をおこない、そのときに前年から書き進められていたこの「第3番」のピアノ協奏曲をニューヨークで初演した。楽曲のスタイルは「第2番」の延長線をたどっているが、ピアノは技巧的にいっそう困難の度をましており、ロマン的な情緒面では、より内面的な深まりを見せている。またこの曲では、基本動機による全体の統一がはかられており、第1楽章で2小節の前奏の後にピアノがオクターヴで呈示する第1主題は、第2楽章および第3楽章に再現する。全体に、シンフォニックな性格が強いのも、この「第3番」の特質といえる。献呈はヨゼフ・ホフマン。

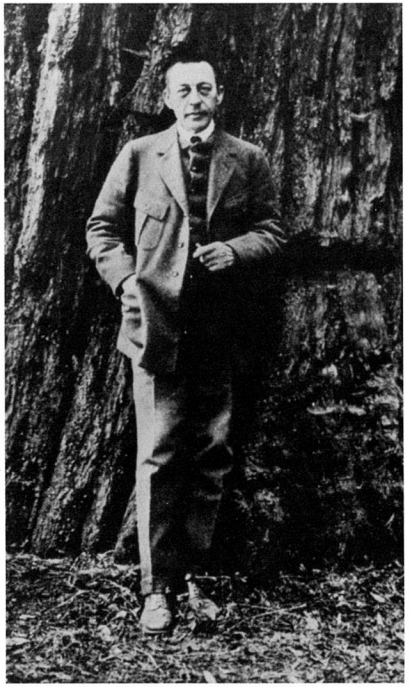
第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント(ニ短調、4/4拍子、ソナタ形式)

第2楽章 間奏曲:アダージョ(イ長調、3/4拍子、3部形式)

第3楽章 フィナーレ:アラ・ブレーヴェ(ニ短調～ニ長調、2/2拍子、ソナタ形式)

藁科雅美

※解説は、2007年発売時のものを転載しております。



ベスト・クラシック100 極ラインナップ

1枚 ¥1,600+税／2枚組 ¥2,400+税　　曲目詳細はオフィシャルサイト www.bestclassics100.jp をご覧下さい。

No. 1	ブルーノ・ワルター	モーツァルト:交響曲第40番&第41番「ジュピター」他	SICC 40001
No. 2	ブルーノ・ワルター	ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」&第6番「田園」	SICC 40002
No. 3	ブルーノ・ワルター	ブラームス:交響曲第4番&ハイドン変奏曲	SICC 40003
No. 4	ブルーノ・ワルター	マーラー:交響曲第1番「巨人」&さすらう若人の歌	SICC 40004
No. 5	テオドール・クルレンツィス	チャイコフスキー:交響曲第6番「悲愴」	SICC 40005
No. 6	テオドール・クルレンツィス	ストラヴィンスキー:春の祭典	SICC 40006
No. 7	パーヴォ・ヤルヴィ	ベートーヴェン:交響曲第9番「合唱」	SICC 40007
No. 8	パーヴォ・ヤルヴィ	R.シュトラウス:英雄の生涯&ドン・ファン	SICC 40008
No. 9	レナード・バーンスタイン	ドヴォルザーク:交響曲第9番「新世界より」他	SICC 40009
No. 10	レナード・バーンスタイン	マーラー:交響曲第5番	SICC 40010
No. 11	レナード・バーンスタイン	ショスタコーヴィチ:交響曲第5番&チェロ協奏曲第1番	SICC 40011
No. 12	レナード・バーンスタイン	星条旗よ永遠なれ～マーチ名曲集	SICC 40012
No. 13	レナード・バーンスタイン	ガーシュウィン:ラプソディ・イン・ブルー他	SICC 40013
No. 14	クラウディオ・アバド	ドヴォルザーク:交響曲第8番他	SICC 40014
No. 15	クラウディオ・アバド	チャイコフスキー:交響曲第5番&大序曲「1812年」	SICC 40015
No. 16	ニコラウス・アーノンクール	モーツァルト:後期三大交響曲～交響曲第39番・第40番・第41番「ジュピター」	SICC 40016～7
No. 17	ニコラウス・アーノンクール	ベートーヴェン:交響曲第4番&第5番「運命」	SICC 40018
No. 18	ニコラウス・アーノンクール	ヘンデル:メサイア(全曲)	SICC 40019～20
No. 19	ニコラウス・アーノンクール	ブラームス:ドイツ・レクイエム	SICC 40021
No. 20	ニコラウス・アーノンクール	ヴェルディ:レクイエム	SICC 40022～3
No. 21	ロリン・マゼール	ワーグナー:管弦楽曲集	SICC 40024
No. 22	ロリン・マゼール	ホルスト:惑星他	SICC 40025
No. 23	カルロ・マリア・ジュリーニ	ドビュッシー&ラヴェル:管弦楽曲集	SICC 40026
No. 24	小澤征爾	マーラー:交響曲第2番「復活」	SICC 40027～8
No. 25	小澤征爾	プロコフィエフ:ピーターと狼&サン=サーンス:動物の謝肉祭他	SICC 40029
No. 26	小澤征爾	武満徹:ノヴェンバー・ステップス他	SICC 40030
No. 27	小澤征爾&ラデク・バボラーク	モーツァルト:ホルン協奏曲全集	SICC 40031
No. 28	カルロス・クライバー	ニューイヤー・コンサート1989	SICC 40032～3
No. 29	セルジュ・チェリビダッケ	ブルックナー:交響曲第8番[1990年東京ライヴ]	SICC 40034～5
No. 30	ギュンター・ヴァント	シューベルト:交響曲第8番「未完成」&第9番「ザ・グレイト」[1995年ベルリン・ライヴ]	SICC 40036～7
No. 31	ギュンター・ヴァント	ブルックナー:交響曲第4番「ロマンティック」[2001年ハンブルク・ライヴ]	SICC 40038
No. 32	ピエール・ブーレーズ	ドビュッシー:管弦楽曲集	SICC 40039
No. 33	レナード・スラットキン	タイプライター&トランペット吹きの休日～ルロイ・アンダーソン・ベスト・ヒット	SICC 40040
No. 34	ジョージ・セル	ライヴ・イン・東京1970	SICC 40041～2
No. 35	グスタフ・レオンハルト	バッハ:ブランデンブルク協奏曲(全曲)	SICC 40043～4
No. 36	リッカルド・ムーティ	ヴェルディ:序曲・前奏曲集	SICC 40045